女學叢誌

驛遞局認可　明治十八年十二月廿六日　毎土曜日發兌　第貳號

東京々橋區南鍋町貳丁目壹拾番地　發行所　績文舍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學叢誌第二號目次

●女子の學科中に割烹の目を加ふべき議●皇后の宮の御詠●蝶思花心の慰さみ●子供の敎育●第二婦人慈善會●結婚法●特赦を與へず●日本書紀作者の年祭●表書佛國「ダッチエス」の貞烈●祇園の百合の識見●流行の俗曲自然起承轉合を具ず●ぬ文字●片男浪●哥書作者の事●筆のまに〳〵〔二〕●短尺の事●圖書●鐵道縮●化裝のまき〔前承〕●胡蝶を印する法●博物館へ納めし秋萟日誌のはしに●賓客の品定●暗の夜の名●おそろしの世や●西洋隱語●其二●つれ〳〵草講義●正誤

十二月廿六日

明治十九年 女學叢誌發兌日表

月					
一月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
二月	六日	十三日	二十日	廿七日	
三月	六日	十三日	二十日	廿七日	
四月	三日	十日	十七日	廿四日	
五月	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
六月	五日	十二日	十九日	廿六日	
七月	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
八月	七日	十四日	廿一日	廿八日	
九月	四日	十一日	十八日	廿五日	
十月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
十一月	六日	十三日	二十日	廿七日	
十二月	四日	十一日	十八日	廿五日	

廣告料定則

一行二十七字詰	自一行至十行	自十一行至二十行	自二十一行至三十行	自三十一行至五十行
壹回分	八錢	七錢	六錢	五錢五厘
二回分	七錢	六錢五厘	五錢五厘	五錢
三回分	六錢五厘	六錢	五錢	四錢五厘
四回分	五錢	四錢五厘	四錢	三錢五厘

本誌代價表

壹冊	正價金四錢	此郵稅壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同四拾錢
五拾冊	同金壹圓七拾錢	同五拾錢

但シ東京十五區內郵稅不申請

本舍ハ御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ叢誌配達不仕事に內規相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵稅共郵便爲替又ハ通運便にて御送附あらんとを希ふ○郵劵代用ハ御斷り申上候尤一郵便切手を以て代價御送附の節ハ壹錢切手にて一割增を乞郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込ミ其爲替劵を本舍へ御送附可被下候

但し東京十五區內ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○女子の學科中よ割烹の目を加ふべき議

寧涯隱士稿

女子の學ばで叶ハざる者の中に於て割烹の一事ハ最とも必要にして欠べからさる者の如く思ひ侍るなり吾邦古來女子の教育法ハ實よ得も云れぬ疎漏を極め中等以上の士人にても女子に教ふるよ僅かに女大學女今川百人首の比類にて足れる事とし其心なきに至りてハ倘ほ之を教ふるの道を求めず徒らに游藝よのみ傾むき琴三味線舞踏挿花等を專ばらに習ハしめ人前人後に於て此れ見よかしに女の多藝を誇る者おほかりしなり又た中にハ極めて高尚業に走り經學文章詩歌連俳等を學習して女博士の名を一世に轟かせしものも稀にハ見うけ侍りたれども是とても强ちに女子教育の旨を得たりとハ申し難かるべし其を何と云に凡そ女子の他人よ嫁ぐか若くハ良人を迎ふるや其所天と苦樂貧富を共にし偕老の契りをなす者なれば身をハるまで其所天の爲に修身齊家の補助者たるに相違なければ必要なる薪炊裁縫の業を顧りみずして只簡詩を吟し歌を詠すればとてなどの之を教育完全の夫人と申さるべきぞ是れ余儕が古來吾邦女子の教育を疎漏なりと斷言する所以ぞかし

然るよ斯の疎漏不完全の教育中に於て猶ほ裁縫の一事を忽せにせざりしハ詢に好すべき事にしあれど此の裁縫と相幷びて女子の心得ざる可らざる割烹の事に至りてハ之を度外に置き古來之を女子に學ばしめたる父母なきハ何の因由する所ろありて然りし乎最とも訝かしき次第と謂べし余の近隣に三五の春を迎へたる阿娘あり其父母年老たるも深く心を教育よ注ぐが故に一日往て疑がひを質したるに説をなして曰く他の事ハ兎も角も割烹の一事ハ余に於て學バしむる存意なし其ハ如何んと云に凡そ年頃の女に厨内の雜務を掌さどらしめなバ容貌自から暴れ肉肥へ下婢一般の趣きを呈して爲めに良媒を失なハん事を恐るゝが故なりと嗚呼なんぞ此言の迷へるの甚だしきや抑々女子の歸ぎ又ハ良人を迎ふるハ修身齊家の爲にして決して艶色を眩ひ或ハ他の玩弄に供するに非ず苟且にも艶色を眩ひ玩弄に供するよ非る以上ハ女子の必らず學習して一家の夫人たる資格を備ふるが爲よ多少其容貌を褻し肉の肥るあるも何ぞ憂ひとするに足んや試みに思へ容貌態度の美なるハ固より人の愛る所なりと雖ども女子の爲すべき普通の業を知らず又所夫の補助者たる功用なくんば嗚呼の白痴の外ハ誰か之を妻女とするを望まんや現に妾又ハ歌姫の如き容貌を磨

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

き態度を造り世智怜悧なるも眞正の女子の業を知らざるが故に世人より一婦人の正に受べき尊敬を受る能はず唯り一婦人の尊敬を受ると能はざるのみならず妾歌妓と賤しめらるゝよあらずや此れ容貌の暴れ肉の肥るを怖れて薪炊及び裁縫の業を捨しが故のみ然らば則ち厨内の雜務の爲に多少容貌を失なふと云を以て女子の必らず心ろかけべき料烹の方法を敎へざる父母は其女をして妾又は歌妓の如き艶色を眩ふとを望む不良心の親御と云ふも敢て云ひ過にあらざるべし

〔以下次號〕

〇皇后の宮の御詠

本誌第一號に正四位山岡鐵太郎君の筆にて　皇后の宮の左の御詠を記し奉りしとは讀者諸卿の知り給ふ所ろなり

　朝ゆふべ我おこたりを時計
　　うつ此はりのさしてあろしれ

讀者諸卿は此の難有御歌を拜讀して如何おもひ給ふ吾儕つゝしんで解釋し奉るよ凡ろ時間の重んずべきは今更喋々を待そ一秒時間と雖とも仇にすべからずとは賢哲の敎へなり然るに世の人々は兎もすれば難きを捨て易きに移る慣ひに制せられて知りつゝ時間を徒消そるは實に慨たき極みあり故よ家々よ時計を備へざるも其時計の功益を眞に利用せずして今は何時なり最早幾時なりと只だ時を知るの要にのみ供して他の功用を見認ざるは實に時計の不幸と謂べし抑も時計は時を知るの用に相違なきも今一歩進んで見るときは則ち人の怠りを督責するの要具なり何とあれば夫の長針短針とも晝夜の別なく運動して止ず今は一時なり油斷なしそ。今は二時なり怠るべからず〇本年本月の今日の何時には再たび廻り會べからず我この針は時の過行を示し懶怠者をして時々刻々省みる所ろあらしむと云ふに似たり去れば苟くも眞に時針を利用して其功を盡させんと欲する者は此の御詠を壁間に掲げ常に拜し見て二時間に爲そべき業は針よ先たちて一時間に仕遂以て光陰を看出すとを勉むべきなり斯くしてこそ我が淸淑賢明なる皇后の宮の慈恩の奉荅する所ろの女子とや稱ふべきの穴かしこ

〇歐米女學の枝折

〇蝶思花心の戀さみ

狐月蘋風樓重譯

前條に示せし規則に遵がい總て配列等とゝのひたる後に至りて胡蝶はじめて言を發して曰く

嗚呼美麗いかな斯の花よ其の色見事にして其香旬馥郁たり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

妾［胡蝶になりし女子自らを云ふ］此花を［花になりし女子を指す］讃頌に何の詞ばを以てせんか。此花は妾に答ふるに妾の常に一花より飛で一花に移り漂泛游びめくりて所ろ定めざるを見て因て妾の多情輕浮なるを責るを以てせり然れども妾が情實は白き百合花の上に休み駐まると數分時間ならん事を望むなり

時に百合花［百合花を取て名とせし女子］其の已れの名を呼を聞き直ちに進みて胡蝶を遮ぎり止めて曰く

吾子の巧言諂諛は即ち其多情輕浮あるを現はし示す兆しなり夫れ信實の友垣たるもの其愛情の厚きに就て云ふ詞ばゝ却つて僅かなるものなり今多情輕浮なる吾子の如きは何等の才徳ありて此花と相ひ比ぶることを得んや夫れ花は單へに麗らかなる太陽の光りを受るに非れば其瓣らを開くことを爲さず

此時大陽と云ふ詞いでしを以て花蟲ともに悉く起て第六則の如くす

即ち妾は汝の諛辭を聞くを厭ひ甚はだ不快らぬと猶ほ細腰蜂の妾を螫して嘲弄ものとそるに異ならじ

是に於て細腰蜂［羽蟲黨の人なり］は其他の者と互に起て己が名を呼で説話するを待しが今細腰蜂と云しを聞て頓ちに其容ちを改めて説話を爲して曰く

大凡諸花の云ふ所ろを以て之を觀るゝ皆な已れ［花を云］を讃賞する他の詞ばを聞て心意を樂しむる時こそ最とも諸花が篤實なる樂しみならん然るに諸花が已に諛辭ふ詞ばを好まずと云ひ佯はりて之を嫌ふが如き僞潔白の詞を放つは其實他より美麗を以て賞られんことを情願するなり若し其花の熱さの爲に垂低その葉の塵に蔽はれて凋萎める時に當りて園丁の來るを見ば大に喜こぶべきゝ［玆ゝ園丁の語いづ第四則を見るべし］倘ほ且つ之を忌嫌ふが如き狀ちを爲すは是れ遨慢と諂諛を好める甚だしき明證にあらずや我等［羽蟲自らを云ふ］の相共に吾子［花を云ふ］の周圍ゝ在て歌ひ舞に當りて園丁の齎らし來る水甕［玆ゝ水甕の詞ば出づ第五則の規則に遵がふべし］を見ては吾々は恐怖するに殊に短氣なる鳳仙花は吾々の恐怖を見て尤とも喜こぶの色あるは不仁ならずや

以上は細腰蜂の說く所ろなり鳳仙花の名を取し童女は其名を呼を聞て直ちゝ説話して曰く

吾子は實に惡性の昆蟲なるのな汝ちは能く譏刺をなすのみ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

若し妾が為に論せバ水ハ萬物中に在て愛好物となぞ何となれば水ハ妾をして美麗くなさしむる大用あれハなり汝ぢ蜚の避飛るが如き諸花に於て何の關係する所ろのあるべき妾ハ又た何れの時を問ハず自由自在に蟲類を退散せしむるの術を得たり。若し之を行なハんと欲し妾ハ自から瓣を開ひて招かば蟲ハ群がり競ひ來るべし而して既に之を厭へば花瓣を少し收縮て種子を實房中より放ち出すことを得るなり斯る事を行なへバ群がる蟲ハ直ちに空に逃さるべし汝ちが類にて地上に水を灌ば喜こんで之を吸ふ者ハ妾ハ友垣として長く游バんことを望むなり汝ぢ細腰蜂定めし其者を知るならん譬へバ蜻蛉の如き是なり

以上ハ鳳仙花の說く所なり〔鳳仙花の實粒を含む者ハ一蟲たま〱其上に止るあれバ忽ち破裂せる者なり〕蜻蛉の名を呼れて其名を取し童子ハ直ちに鳳仙花に對したり〔以下次號〕

◎内外雜報

○子供の教育　有名き經濟學士フリードリッヒ、リスト氏の曰く獨逸ハ他國と違ひ理論より開けて實際に入りし者なり先づ學術を研き究めて後ち之を實地に施せし者なり先づ内部の智識を練り磨きて後ちに之を物外の擧動に發せし者なり故に獨逸人の百頁の行為ハ一として理論に基かざるハなし之を例へば行止飲食の術より心の喜憂に至る迄で悉く理論の上に之を學び其理論に基きて之を實行ふ者の如し是を以て其日常の擧動に迂濶き事ハ實に笑ふべき事甚だ多し」成程當地の人ハ万事悉く理屈にのみ縛り附られて運動くことなれば中にハ迂濶きの譏を免れざるともあらんなれども又他の一方より見れバ能く理屈を固守る故に惡しき習慣の奴となることなく日常の生活も能く學問上の眞理を實用し莫大なる利益を享る者なり就中予が面りに見し所にてハ子供の養育が一番良き樣に思ハる我邦にてハ上等社會の人の父母たる者が我子を養育に學問上の眞理を利用が如きことハ一切之なく唯舊來の習慣に從ふてとなれば固より不都合のこと甚だ多く例へば子供の泣く時ハ其子の泣く原因をかまハず直に之に乳房を含ませ若しくハ抱き歩きて機嫌を取り却て子供の意地を惡くし又時を定めずに乳を與ふる故腹の加減を狂ハす事をしらず又ハ早く子供を笑ハしめんが為め百般の手術をするハ其子の為に心經を衝動のすの害有ることをしらず又子供の毒有る物若しくハ大切なる者を握る時ハ直に之を拔き取りて却てろの泣くと泣かざるに論なく必らず其子の心の裏を驚すの害ある事をしらざるの類

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

枚擧に暇あらじ當地即ハち獨逸に在りてハ上等社會にいたる程學問上に基きて小兒を養育する事なれば全たく日本などゝハ其趣を異にし例へば毒有る物若しくハ大切なる物等を握る時ハ其子供の視官に一層美麗しき者を求めて之を摺り代へ其感覺を激動さゞることを勉め又智慧の附ざる子供を無理に笑ひ付かせんとする如き惡洒落ハ一切之を爲さず又子供の泣く時ハ其泣く原因を考へ空腹の時にあらざれば之に乳を與へず又抱き歩きて機嫌を取るが如きことハ一切之を爲さず一度斯く機嫌を取る癖を附る時ハ向後此癖愈増長りて終にハ膝の上を離れざる意地惡者と爲り父母も之を持て余すに至ることならん其泣くや病の爲なれば唯之に藥を與へ或ハ小便秘の爲なれば之に灌腸し別に機械をバ取らず故に子供も亦た何たる原因無くして泣くことをなし凡そ小兒にハ惡き癖ハなるべく附ざることを勉むハ勿論好き癖を附くることに始終注意け且つ万事に規則を立てゝ敎るを專一とせり故に乳房を含ますると時間を計りて（通常三時間に一回）飮まし尤大小便の如きもなるたけ時間を定めて爲さしむるの好き癖を附くることなり尤も子供の生れて日を經ざる中ハ此大小便の規則ハ無論容易くハ行はハれず之が爲に襁褓股引の類ハ非常なる數を用意すること

とにて予の聞く所に據れば上等社會ハ少くも襁褓八九十枚股引二三十枚ハ必らず用意すといへり斯く多數の襁褓を貯ふる所以ハ身体の毫も濕氣に當らざらん事に注意け襁褓に些少の濕氣あるも決して之を用ひざるほどなれば九十枚の襁褓あるも悉く之を用ひて余す所なきこととなり又夏に至ると汗發ること甚しければ一日の中に數度となく襦袢を着替へさせ身体を清潔らかにするの類ひハ固よりのことにて沐浴ハ毎朝十時に爲し又晩七時の頃にも手拭を湯に沾めして全身を拭ふことなり但し其湯の加減ハ寒暖計を以て之を計り決して日本の如く手加減にて入湯さする如きことハ爲さず又此湯の温度も學問上に原きて子供の生れて未だ日子を經ざる內ハ概ね二十八度と爲し夫より日子を經るに從ひて減じ二十七度と爲し又減じて二十六度と爲す由なり（本月廿日東京日々新聞）

○第二婦人慈善會出場貴夫人令孃ハ左の如しと同會の第二次報告に見ゆ○番外 三品威仁親王殿下妃○二品熾仁親王殿下妃

○第一番 大木伯爵夫人○種田夫人○松田夫人○川村伯爵夫人○武市夫人○加賀夫人○芳川夫人○松山夫人○田中夫人○丸橋令孃○石井夫人○蒲原夫人○第二番井上伯爵夫人○三井夫人○日下夫人○森夫人○三輪夫人○小浦夫人○井上夫人○高木夫人○三輪令孃○廣瀨令孃○第三番 女官各位○山川夫人○平井夫人○柳原伯爵夫人○下田夫人○西川夫人○三條夫人○渡邊夫人○神田夫人○北島夫人○古賀夫人○林夫人○片山令孃○第四

二十三

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

番　戸田伯爵夫人○前田伯爵夫人○大村子爵夫人○松平子爵夫人○瓜生夫人○林夫人○高階夫人○伊東夫人○賀吉夫人○松山夫人○林夫人○金井夫人○第五番　山田伯爵夫人○鍋嶋侯爵夫人○伊東子爵夫人○伊東夫人○村田夫人○平岡夫人○大塚夫人○栗塚夫人○北畠令娘○田中夫人○田中令娘○廣岡夫人○第六番　山縣伯爵夫人○寺嶋伯爵夫人○榎本夫人○三好子爵夫人○曾我子爵夫人○武村夫人○二橋夫人○長崎夫人○柴山夫人○大森夫人○町田夫人○岩男夫人○西川夫人○中嶋夫人○山縣夫人○中村夫人○第七番　伊藤伯爵夫人○樺山子爵夫人○大迫夫人○大河内子爵夫人○杉夫人○香川夫人○兒玉夫人○伊藤令娘○山本夫人○第八番　大山伯爵夫人○長岡男爵夫人○小鹿嶋夫人○池田夫人○高峰夫人○豐住夫人○周布夫人○藤田夫人○目賀田夫人○荒川夫人○相塲夫人○安田夫人○村岡夫人○有地夫人○山川二葉子○第九番　佐々木伯爵夫人○谷子爵夫人○小村夫人○井上夫人○小田夫人○津田令娘○吉原夫人○佐々木令娘○大鳥令娘○三宮夫人○嶋地夫人○片山夫人○第十番　毛利公爵夫人○吉田夫人○三嶋夫人○木戸侯爵夫人○吉原夫人○田邊夫人○柳谷夫人○伊賀夫人○河村夫人○河上夫人○井關夫人○新山夫人○第十一番　伊藤令娘○松方令娘○三嶋令娘○安藤夫人○三嶋令娘○三嶋令娘○穂積夫人　石井令娘○松山令娘○山本夫人○本田令娘○田邊令娘○新宮夫人○相浦令娘○新宮令娘○關夫人○山尾令娘○渡邊令娘○大木令娘○澁澤令娘○荒川令娘○松方令娘○林令娘○長森令娘○西川令娘○西川令娘○神田令娘○小田令娘○ガラバ令娘○福原令娘○

◎結婚法　華族中の有志者輩が結婚法を設けんとて過日來屢協議有りしが此程既に脱摘したりと聞く

◎特赦を與へず　曩に海牙に於て日本外交官櫻田親義君を殺したる白耳義の女子セーヌ、ロレットの處刑に就き頻りに特赦を哀願したれども荷蘭國皇陛下ハ斷然拒絶し重禁錮の刑を實行し給へしと云ふ左も有べき事にこそ

○日本書紀作者の年祭　元正天皇の勅を奉じて日本書紀を撰み給ひし一品舎人親王（崇道盡敬皇帝）ハ天平七年十一月十四日の薨去にて今年ハ一千一百五十年に相當するを以て國典家の聞えある栗田寛大澤清臣飯田武郷小杉榲邨の四氏主唱となりて去る十三日に麹町公園星が岡の茶寮にて祭典を執行せられき其景況ハ廣間に祭壇を設け床にハ三幅の懸軸を掲く一ハ有爲なる守住貫魚翁が丹青を抽んで畫きたる親王の日本紀を見給ふ圖其の二ハ岡田爲恭大人が精細を盡せし親王日本紀を前に置せて太安麻呂朝臣古事紀を携へ稗田阿禮侍坐したる圖其三ハ菊地容齋翁の畫かれし阿禮と舎人が舊辭を語るを安麻呂朝臣が筆取りて居らるゝ圖なりとぞ午后一時頃より祭式を始む齋主ハ本居豐頴君にて來會有し諸文客何れも長歌短歌詩文章を詠進せられしうちよ川田甕江先生の詩を左よ掲ぐ

飛鳥朝庭國運新　果然帝子出麒麟
請看舊事焚亡日　却是斯文興起辰
衆説折衷歸獨斷　千和遺列仰惟神
賢王試擧漢家例　比擬阿間恐決倫

◎内外烈女傳

○表題人物傳　〔二〕

○佛國ダッチエスの貞烈

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人命ハ朝霜の如く一足つゝに消ゆくならひなれども目前り罪なくして暴人の手に死なんとするに當りてハ丈夫と雖ども百方之を遁れんとするハ人情なるに貞烈の爲に死を辭せず所夫を勵ましたるハ貴女ダッチエス是なり西暦一千五百八十八年の頃ろ佛蘭西國シヤトーダンコリイムの侯たりしチユク、テ、バアノンと云ふ人あり天主教に反對して痛く之を厭撃したるに同教の統領なるもの深く遺恨となしつゝ種々の僞言を搆へ國王に讒訴してバアノン竊かに謀反を企て其用意頻りなりと告たりければ王ハ大に驚ろき其ハ容易ならぬ珍事なり大變に至らぬ先に彼を捕へよと侍衛の臣をチヤトーンタンユリイムに遣ハし欺むいて捕縛せんとせしにハアノンハ思ひかけなき禍罪を蒙むり無念やる方なけれども之を辨解に道もなく去とておめ〳〵捕はれたらんにハ死刑のがるべくも非ず寧ろ死すなら城を枕らに死するに若ずと即ハち城を堅ふし堀を深くして其使者を拒みけり是に於て王ハ謀反いよ〳〵極まれりと爲し今ハとて兵を操出したるが徒づらに兵を損するも無益なり良一策ありとて即ハち奇計を以てタッチエスを誂へ之を縛して城門の下に据へ嚴しく城を攻たてけるにハアノンも之に應じて大小砲を打ち出し忽まち修羅の有様を現出せりタッチエスハ砲煙空をまき彈丸雨の如く注ぐ中に起て毫しも動せず且つ不思議にも微傷だも負ず却つて之を護る所ろの兵士二人死傷しければ敵ハダッチエスの居が爲にハアノンハ發砲せざるべしと思ひきや斯く手痛防かんとハ是に於てタッチエスに迫り女ぢ早く所天に降伏を勸むべし然らずんば先つ女ぢを斬て軍神を祭り而る後にハアノンを斬んと嚇し賺しつ説すゝむるにダッチエスハ片頰に笑を含み妾女性ながらもタンユリイム侯の婦に候ふふ所天の名譽と安全の爲なれば此身車裂の刑に所せらるゝも何ぞ命ををしみ候はん。然るを御身等の勸めにて爭でか卑怯の擧行を致すべき妾所天を亡ぼして王后の富を受んより寧ろ所天の爲に死するを此上もなき榮となすと言罵しりて更に城の方に向ひ良君よ〳〵妾ハ良君の名譽の爲に死するなり女々しく妾が安危の爲に心ろ臆れ云ひ甲斐なき擧動をなして千歳の末に汚名を殘し給ひそ。願くば妾の遺骸を楯として更に快よく一戰を試ろみ給ひかし妾の榮辱死生ハ一に良君の身に係り候らふ良君妾の爲に死し給ハゞ妾も亦永存へるの心なし唯だ願くバ良君長しなへに存じて妾が死後を吊らむ給ハゞ妾が此世の思ひ出に侍るなりと聲を限りに云ひ呼べば情に疎き兵士も節義に伏して殺し得ず更に他の城攻を謀るう

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ちにハアノンの朋友ハ讒言たる由の証蹟をあげて之を國王に訴たへたるが故よ謀反の疑がひ始めて解け其罪を宥められたりしかバタツチエスの悦こびは何に譬へん樣もなく城門の開くをもどかしく思ひ梯を架して城内よ入り抃舞して所夫の恙なきを賀し互に天祐を深謝せしとぞ

○祇園の百合の識見

寶永年中京師に於て夫の

雪ならば梢にとめてあすも見ん夜半のあられの音はがりして。

と云ふ名歌を讀みりし梶と呼ぶ女子あり祇園鳥居の側ハらに茶見世を出して營みとなせしゆゑ人呼で祇園の阿梶と云ひけり一女を養ない名を百合と云ふ百合其母のなす所を習ひまた和歌を好み日に茜の前垂を掛て客に茶を供し間暇あれば則ハち筆硏を手よして風月を嬉しめり天の成せる麗質玉の如くなるを以て都下少年子弟の懸思する者多かりしか百合ハ毫も之を顧みず。時に徳山某氏と云ふ士あり元幕府の旗本の子なれども事故ありて都下に流寓し落魄極まりて自から生活よ苦しみしかバ百合ハ之が爲に心を竭して扶助し遂に之と相暱みて一女を生り其頃ろ徳山氏の宗家子孫たえたるを以て親族の人々相議し某氏を呼び迎へて嗣と爲さんと輿馬を備へて京師に登りければ某氏ハ百合を共よ攜さへ歸らんとせしに百合ハ之を辭して妾の郎君に侍する已に十年に餘りに候。一旦あひ離るゝハ情に忍び難しと雖ども今や晝錦の榮を荷ふて歸り給ふに婦人を携さへ往たまハば恐らくハ人の指目を招き申すべし殊に妾ハ路傍の楊柳もとより郎君の攀折に堪へず宜しく別に良閨を擇びて琴瑟和諧の道を謀り給へかし此れ郎君の名譽を全たくせる所ろなりと某氏ハ猶は之に要して曰く吾れ客土に飄泊して幸よ飢渇を免がれ今日あるを致せハ皆な卿の力に賴り然るに一旦富貴にして糟糠の妻を棄るハ余の心に於て忍びざる所なりと懇々說くも絕て詞ばに從がハざりければ去ハ女を伴ない往んとするに百合また之を辭して郎君なほ少壯におハせバ新人を娶たまふに於て前途のならず多福なるべし何ぞ兒を伴ない往に及び申さん妾巳に郎君に相離るれば誓ふて他夫に見えず獨り青燈を守りて此兒を撫養し之を視る猶は郎君を見るの如くせん然るに之を幷せて附し去らるゝ時ハ何を以て日を消すべきと是に於て某氏ハ深く其情を察し遂に之を置て去る是より百合固く節操を持し一ぱら意を兒の撫養に用ゐ長そるを待けり。常に兒に言る樣ハ吾子の父ハ天下の御旗本なれば吾子其身を珍惜し自から輕視する勿れと女既に長

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

じて亦た才情あり爲よ佳壻を擇べとも一も意に適する者なし。時に眞葛が原に池生なる者あり書畫を賣て生活と爲せども貧にして自のち給せず故に人みな之を蔑せども獨り百合ハ之を奇となし遂に女を以て之に妻ハす女も亦た所天の爲す所を見て頗ぶる書畫を善くし夫妻終日紙を展べ墨を舐り琴酒わひ樂しみ薪炊欠乏を告るも敢て意とせずして晏如たり。百合見て大に善んで曰く吾事畢る瞑するも何の恨みかあらん。既よして病て死す。其後ち池生ハ書畫を以て名を海内に成す即ハち大雅堂是なり女ハ即ハち玉蘭女史なり。百合の德山氏を流寓中よ識り池生を落魄の間に鑑す皆な其見る所ろ違ハず識見想ふべし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○女學

○流行の俗曲　自然起承轉合を具す　丈我翁

世に行なハるゝ俗曲を聞くに自然から起承轉合を具して韻を押り斯あらざれバ調に合ぬゆゑなるべし。唐人の詩を作るも御國人の歌よむも同じことにて强て韻を押にハあらざれども自然と之に合ふなり。看るべし〔起〕岡崎女郎衆〔承〕岡崎女郎衆〔轉〕岡崎女郎衆者〔合〕善女郎衆。また〔起〕伊勢ハ津で持〔承〕津ハ伊勢で持〔轉〕尾張名古屋者〔合〕城で持。俳諧師素堂と云ふものゝ友人芭蕉の瓢に題して一瓢重岱山自笑稱箕山莫慣首陽飢這中飯顆山これらも上文の例にて同字を押るなり。又坂ハてる〳〵鹿鈴ハくもるあひの土やま雨が降る是ハるの韻なり又箱根八里ハ馬でも越す芽越に越れぬ大井が杷是ハ六麻の韻を押るものなり又花ハ折た姿いのちハ惜枝こゝろつくしの吾がなも此是ハ四支の韻にして國風の關々雎鳩在河洲窈窕淑女ハ君子好逑と同調にして七絶の格なり又咲さくらになぜ駒つなぐ駒がいさめバ花がちる是ハうの横行を押むなり此類詩經に多く見へたり引あてゝ考ふべし

○ぬ文字

假名文章にぬと留るを漢字に譯すれバ矣の字あり萬葉集十六の歌に耆矣とある矣字にてぬ文字の用ゐかた知べし

○片男浪

紀伊國の和歌の浦ハ男浪バかり打て女浪うたず。此ゆゑに歌にも片男浪とよむと申す人あり。和歌の浦にしはみそくれバかたをなみあしべをさして田鶴なきわたる。此歌しはみちくれバ潟を浪にてをハ助語あり潟ハ干潟なり此にて男片浪よあらざるを知べし秋齋問話よ見ゆ

○哥書作者の事

正格の歌ハ素盞烏尊の三十一字よりはじまり長しへに今よ來し此の跡を慕ふ者ハ貴のらずして雲の上の御歌會にまじハり猛き武士も心ろを和らけ目に見へぬ鬼神をもあハれと思ハすハ蓋し和歌の徳なり殊に思想を擴むるに於て千態萬狀無盡藏と謂べし故よ代々和歌集あるも一も同歌あるとなし玆に敕なふびに宣旨に成し歌集を擧ん此れまた斯の道の一助か

◎萬葉集　○二十卷
平城天皇大同年中成る
左大臣橘諸兄公撰

◎古今集
醍醐天皇延喜五年　奉敕　紀貫之　紀友則　凡

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

河内躬恒　壬生忠峰等撰　○二十巻

◎後撰集　村上天皇天暦五年　藏人伊尹　大中臣能宣　清原元輔　源順　紀時文　坂上望城等撰○二十巻

◎拾遺集　花山院天皇御撰　長徳年間に成る　或ハ曰く公任撰すと　○二十巻

◎後拾遺集　白河院天皇應徳三年　中納言通俊撰　○二十巻

◎金葉集　白河院天皇承保二年　奉敕　源俊頼撰　○十巻

◎詞花集　近衛天皇天養元年　奉旨　三位昭輔撰　○十巻

◎千載集　後鳥羽院天皇文治三年　奉旨　俊成撰　○二十巻

◎新古今集　後鳥羽院天皇文久三年　奉旨　通具　有家　雅經　定家　家隆等撰

古今集以下を八代集と云ひ後の五集を合せて十三代集とす

◎新敕撰集　後堀川院天皇貞永元年　奉勅　定家撰　○

◎續後撰集　後深草院天皇建長三年　奉勅　爲家撰

◎續古今集　龜山院天皇文永二年　奉敕　九條基家　爲家　行家　光俊等撰

◎續拾遺集　後宇多院天皇建治年中　奉旨　爲氏撰

◎新後撰集　後二條院天皇嘉元々年　奉旨　爲世撰

○筆のまに〳〵〔一〕　千束村　みきを

月卿とハ三位以上。雲客とハ四位以上の稱なり。天子を日に喩へ大臣を月に喩へ殿上人を雲に喩ふ〔殿上人とハ昇殿免許の人を云ふ〕維新前天子に勤仕するを公家と云ひ侍ひを瀧口と云ひ又北面の武士とも云ふ。院の御所に勤むる公家を院參衆と云ひ侍ひを院の北面と云ふ。春宮〔皇太子〕の奉公を坊官と稱す此れ春宮の御所を坊と唱ふるが故なり侍を帶刀と云ふ。女御ハ雄略天皇七年に始まり二位に相當す入内ありて中宮とも申す

勾當の内侍ハ宮女の極官なり三位に相當す長橋の局とも云ひ禁中内外の諸事を司どり又天子の勅宣を傳ふる役なり

女孺ハ禁中にて御燈の役なり多くハ加茂八幡社人の女より出

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

づ采女ハ配膳の役なり
御息所とハ親王の御女を云ひ北政所とハ攝政關白の妻を申し御臺所とハ大臣の妻を云ふ大政所とハ大臣家の妻の隱居せしを申すなり總て北の方又ハ簾中と云ふハ多く二位三位以上の人の妻を指と知り給ふべし

○短尺の事　同じく

短尺ハ頓阿法師以後の物なりと云ども昔しより敍任除目の時短尺中文と云とあり官位を願ふ事を書つけしなり去バにや御堂關白道長公短尺中文の多くありけるを裏返して歌かゝせ給ひといふ事淸少納言の日記に見へたり　草廬漫筆

◎女紅

○圖畵

圖畵ハ愉快にして且つ雅致ある技にして他人の指圖に由るとなく唯だ自からの意匠に隨がひ勉强學習するも能く至大の進歩を爲し得ると他の諸藝よりも優れる者あり況て其人の性質器用にして此技を學ぶに適當せば之をして善良なる敎師の敎授に指圖あらば其進歩を見ると幾干か英のエル、フアレンタイン女史曰く夫れ吾儕の正に尊重そる所の敎師なるジヨン、ハーレイより若くハハーデイングより受る二三の敎訓ハ少年なる女子の之を得るに及びて能く其趣向を改良するとハ其の獨り自から此の技を多年間勉强せしに勝れる者あり。と云れしハ誠に然るべきとなり

然れども今假令其の少女の友垣等之れに一の良敎師を與ふる能ハず若くハ之を與ふることを欲せずと雖とも斯る少女ハ之が爲に其技を廢するにハ至らざるべし是れろの嗜好と勉强と其自然に其技を習ふに適應する所ろとに由て能く自から大に長熟するとを得たれバなり斯る時に當り余等ハ尙ほ斯る少女が他人ゟ二三の敎告を受んとを望めり而して其の敎告ハ老練なる人に於てハ既に知らるべけれども斯る少女にハ全たく無用あらざればなり其敎告ハ如何か

凡そ圖畵を學習そるにハ先づ始めに畵筆を用ゆるに怯怖せず大膽にして白墨を用ふるが如き意あらんとを勉め又彼の有益ならずして拙なき趣向に出る美麗細小の圖畵ハ之を避け眞實且つ端正なる圖畵を作らん事を專らに力むべく而も純良なる畵稿ハ往々貴重にして且つ愉快なると完全落成の圖畵に勝れる者あり殊に斯る畵稿ハ能く其描ける人の意匠を寫し又よく其筆力及び其見る所ろの端正眞實なるを證するに足なり故にジヨンエーア、レーノルヅ氏言るとあり曰く人の此の

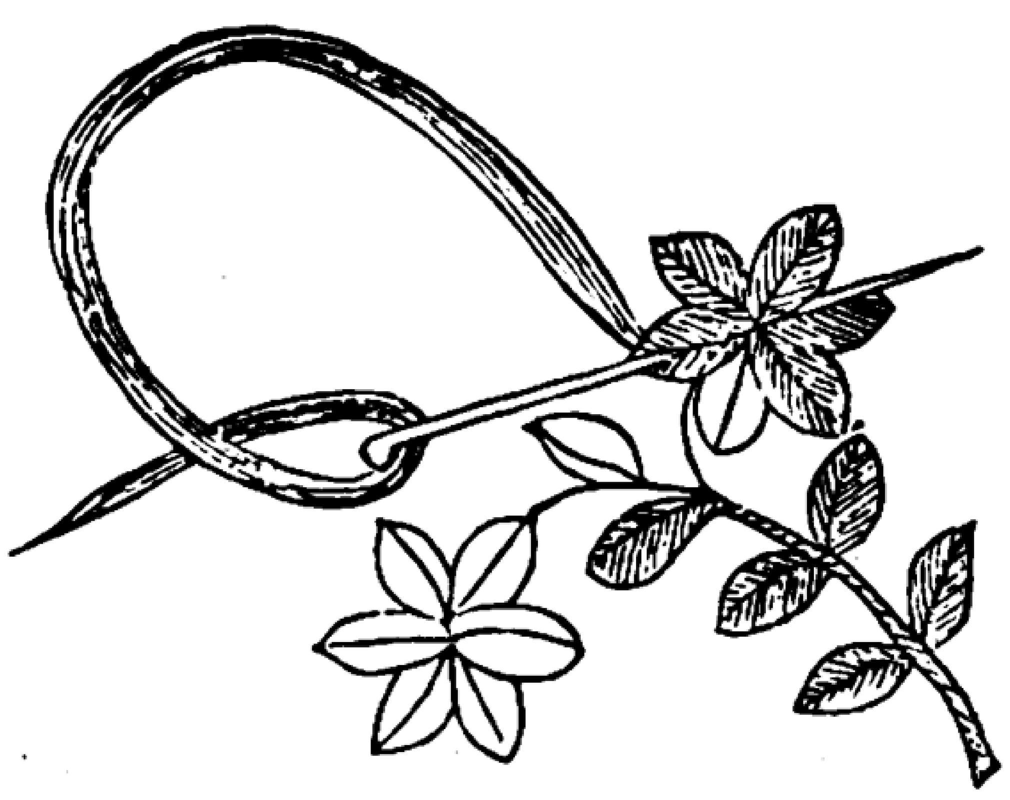
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

技に熟達せざる者ハ圖畫の粗漏よして且つ其体裁全たく成就せる所なけれども博識の人の爲に甚だ尊重せらるゝを見て往々驚ろき訝かしく思ふ者あり然れども是等の圖畫ハ眞に貴重すべき者にして其貴重さるゝ所由ハ全たく意の趣向を表ハし出したればなりと。夫れ純良なる畫稿の人を悦こバしむるハ斯の如き者なれば此畫稿を學習し始めんにハ甞に善美なる技業と云さる可んや

〔以下次號〕

○鐵道縫

鐵道縫ハ誠に心ろやすく殊に手ばやく縫得らるゝが故に此の名あり左に著ハす所ろの花又ハ葉を作るよハ先づ裂地に胡粉にて大凡の圖を描き而して縫ふ順序ハ莖より葉に至り葉より花に至るなり。さて縫糸ハ練操糸又ハ羅紗糸等の太き糸〔色合ハ草花の色合よ從がふべし即ハち桃ハ桃色山吹ハ山吹いろの類と知るべし〕に針を通し葉なれバ極端より針を通し葉の中心の筋に至りて針を通し而して一縫ぬひて針を返し其抽し穴の側より又直ちに針を通して向ふの端へのけて針を通し



て抽くなり其より針を返して又中心よ戻り遂よ本の處ろへ返ると先の如くも斯の如く同じ樣に胡粉よて描きし跡を全たく蔽へば美麗なる縫となると圖と其針はこびとを熟々見て會得すべし

○化裝のまき〔承前〕

容ちハ身を正しふするの源と。身正しき時ハ心ろたゞしく。心ろ正しき時ハ貞操たゞしく。心と容ちハ鏡の影をうつすが如し心ろ正しからざれバ自然ら其心形を外に顯ハしいのほど容ちよ心を要ひたりとも動作ろふぐしく。身の備へよろしからざれは又心ろ正しからざ故よ心ろを正しふして後ち化裝そべし。心ろたゞしき時ハ假令容ち作らずとも身体程よきに適ひ神佛の冥護を蒙むり位ゐなふして人の愛敬を受けて幸はひを得る者なり。化裝容ち作りを良とそるも目覺るバかりよ作り立るハ游女歌妓に似て心の淺はかよ長なしからぬを看破ふるゝなり髮の結樣化裝の仕樣衣服の好みをとなしく駘蕩なるべきこそ一際心ゆかしく思ハる。されバとてをとなしき斗りを善として古への風俗を學び習へば姿のいじけて見よからず只だ其時の風俗に從かひ賤しからざるに心を用ゆるを肝要となすなり少女諸卿に努々以上の事を忘れ給ふべからず

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

〔脊の低きを高くそる事〕生れつき脊の低きを高くせんにハ其人の天然に離れべきにあらされども。人の脊ハ大凡ありて高きも低きも二三寸を越す此の二三寸ハ身の動靜に由て高くも見する仕樣あり其法ハ脊すぢを直に立て肩を両方へ等しく揃へ首を立て。伸る樣に押あげ。身を少しそる心もちに腰をのそれば整然と恰好よく高く見ゆるなり其上に履物も通例より少し高きを履くべし髮も髷の高き恰好がよし。衣類の仕立樣ハ身巾を少し狹き方に仕立。摸樣ハ立長たる草花の類。縞なれば堅筋の太きを善とす帶のメやふハ手さきを餘り長く出さず上の方にて高く結べハ大凡の持合にて人並の高さに見ゆる者なり脊の低き隱さんと徃々衣類を長く着て引ずり歩く者あれども之にてハ却つて脊の低きが目に附て見くるし者なれバ矢張整然着たる方がよきなりさて足どりハ指びの先をたてゝ歩く心もちがよし。脊の低き人の足どりを見るに多くハ踵にて歩く風情あるゆゑにべたつきて猶さら低く見ゆると知べし

〔以下次號〕

○胡蝶を印する法

此紅葢ハ袋戸棚の戸又ハ鏡葢ひ團扇等の類に施こすに美麗なる技なり此を倣さんにハ先づ死せる胡蝶の翼を截りて清潔なる紙に翼を置き其形ちを胡蝶の飛し時と同じ樣にし次に他の紙にゴム糊を敷き此へ胡蝶の翼さを移し其上へ白紙一枚を乘て指又ハ小刀の平滑にて柔和かに摩擦れバ十分に羽翼を印そることを得るなり而して其体を両翼の間に畵て彩色すれば眞の胡蝶の如く成就すべし

◎群芳詞苑

○　　多治比ノ眞人象二

菊の後悔の前のながめハ峰々のもみぢ谷々の蔦にして夫の杜樊川が二月の花よりも紅ひありと賞たゝへしもことわりにて只なよとなふあかぬ詠あれバなりまひてや露しぐれの之にうつりたらんにハ如何の

友もなきしぐれの庵のもみぢころ浮世の外のあハれなりけれ

○博物館へ納めし秋葵日誌のはしに　　千束の里　ときを

なき人を忍ぶるともいつまでぞけふのあハれハあすの吾身をと讀たりし昔しの人の言の葉も定にや朝よ時めきし平家も夕べには八嶋の浪にたゞよひ昨日まで流れ來したる德川の水涯の生し葵草も今日ハ跡なく枯はてゝ秋葵日誌を止めしむ有爲轉變の法の数へ今こそ思ひ出されぬ

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

おほひ草かざす昔しのしのばきてひもとくとも涕だなりけり

○　　小石川　洞玉

もきぞらをしらぬゝなげや冬の梅

○心境有レ景　　任天居士

うかみ出る心のおくの山ずみは人にのたれぬながめありけり

○鬼の念佛の繪に　　熊野　松柏

つのをれて後のこゝろや寒念佛

○御伽草

○賓客の品定

山崎宗閑は其庵の入口に左のたどけたる輕口の額を掛をきしとぞ

一　上の客人立かへり　一　中の客人日のへり

一　とまり客人は下の下

○暗の夜の名

或る縉紳がたに近侍せる小性。あまり眠りて役よ立ず。三度の食時に斗り目醒て其餘は晝夜ねふりけるも名を暗の夜と命せられける蓋しくらふて用に立ぬの意なり。ある日ざん〴〵折檻しけるが其夜も例の如く主の前に侍したり。主之に問て汝ぢ眠たきやと云ければ。小性は否ねむたくは候ふはず只時々まぶたが訪づれ申し候

學藝よ心を入ざれば暗の夜の名を得る獨り此の眠り小性のゝならや

○おそろしの世や

清貧を樂しみける人牡丹を植しが付ずして枯なんとしければ大に憂ひて植る法を隣人に問ふるに隣人は心よく承知して其は安き事なり其法は根の下へ一錢銅貨を埋むれば即はち付ん試みに思へ今の世に錢あれば生錢なければ死そるを

○兼好法師句の首尾によねたまへ。世にもほしと置き頓問法師の方へ歌讀て遣しける

よもすゞしねざめのかきはたまくらもまろでて秋よへたて

なきかせ

頓阿法師の返し米は無し錢少しといへるなり

よるもうしねたく我せこはてはこずなをざりにだにしばし

問ひませ

南北朝の乱れよて騒がしき世の中に居りながら斯の如き風雅は後々には得がたし

西洋隱語

余を善く用ゐよ余を用もるよは余が表面を研けよ余は常よ各

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

種々の人と化す或ハ美女となり又醜婦と變ず若し余が背面を磨剃するときハ余ハ忽然消滅し又人と變ずる事能はず〔鏡〕

其二

余ハ唯眼一つなり而して余が眼ハ万物を見ることを能はず然れども此の一眼目ハ余が爲に必用なり又余は才智無と雖も極めて鋭利にして人若し余に誤まりて觸ることあらバ非常に恐怖るべし然れども余ハ衆人の爲に欠べからざるの物なり〔針〕

◎つれ〳〵草講義

任天居士

その子むまごまでハはふれにたれど猶なまめかし。それよりしもつかたハ程につけつゝ時にあひしたりがほなるも。自ハいみじと思ふらめどいと口をし。

●その子むまご　子孫の事●はふれにたれど　零落たるなり○身ハすてつ心をだにもはふさじつゐにハいかゞあるとしるべく○なまめかし　優柔なる意●それよりしもつかたハ　五位六位　殿上人より以下をさす●したりがほ　得意顔の事をいふ●いみじ　大層ならんと自慢する義●いと口をし　うしろ指さゝれるが殘念の事なり

法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。人には木のはしのやうに思はるゝよと清少納言がかけるも實にさる事ぞかし。いきほひまうにのゝしりたるにつけていみじとは見えず増賀ひじりのいひけんやうに名聞くるしく佛の御教にたがふらんとぞ覺ゆる。

●法師ばかりうらやましからぬものはあらじ　此ハ法師の方にて憂たる詞と知るべし○清少納言　肥後守清原元輔が女なれバ清少納言と云ふ一條院の皇后に仕へし女房にして枕双紙の作者なり●いきほひまうにのゝしり　勢ひ猛く時に遭て威勢強きと●増賀ひじり　京の人諫議大夫橘恒平の子にして大和多武の峯の僧なり詳らかに元亨釋書に傳わりひじりハ聖人名聞　四十二章經に學道之人去心垢染行即清淨矣名聞なんぞ佛道に與からん●佛　佛とハ覺醒の義煩脳を轉じて道〔菩提〕に覺入するを云ふなり

○正誤

第一號の紙尾に客員田嶋象二と掲載せしハ誤に附之を削除す

●發行の主意の文中伊裝の裝ハ弉裝冊ハ弉冉●宜給の宜ハ宣○四行メ古しへの下とを脱す●七行メ敬しの下へを脱す●十五行め蟾々ハ蟾のゝのもすり假名の本文に入りしなり●二頁の一行メ具ハつふさつふの轉植及びさを脱す●七行メ物せずのすハざの誤●そにハかのにハこの誤

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

華族女學校總裁下田歌子先生訓歌
任天田嶋象二著編

貴女至寶 大全女用文姫鏡

木版大本全二冊
精彫圖畵彩色入
正價金七十五錢

此書ハ上卷に両皇后の宮の御尊影を掲げ奉り次に婦人品位の繪畵名所圖畵三十六烈女圖傳百人一首女禮式を始めとして敎育編化粧の巻歌學裁縫學苟くも女學女紅に關係ある者ハ漏さず之を網羅し其件數百に達し且つ悉く之に繪畵を挿入し下巻より新体の女用文幷ニ熟語を毎文章の末段に塡めて以て作文に容易ならしめ贅頭にハ貴女諸卿が坐右に於て日用欠く可らざる家事經濟編より育兒法まで掲けたれバ實ニ數百冊の女學女紅書を兼有する近世無双の女子寶典ニして眞に日本女鏡に背かさる良書なり冀くば購讀して廣告文の誣言ニあらさるを知り給ふべし

且ツ愛讀諸君の便を圖り豫約低價法に倣ひ特別非常の廉價を以て十九年三月十五日迄貳千五百部を限り廣發賣せんとす尤御購求の多少を論せず出板せしものなれハ御送金の順序を以て御送本可仕候

東京日本橋區西河岸町十二番地畏三堂書肆　須原鐵二

中村敬宇先生序　湯目北水先生編纂
○歐米女權
全壹冊　定價三十錢　郵便税四錢

成嶋栁北先生序　副島種臣先生閲　曾根俊虎著
○淸國漫遊誌
正價金四拾五錢　郵税自便

東條竹翠著　繪入かなつき
○婦女庭訓の眞鏡
全壹冊　定價三十錢　郵便税四錢

七條峯太郎編輯　鼇頭作文要用字類
○女子必携 女子作文楷梯
和製中本全壹冊　定價金貳拾貳錢　郵便税四錢

滑稽新話 明治流行うそ八百
此書ハ能く明治の人情を穿ちたる奇にして妙と云ハさるを得さる滑稽本なり下編ハ上編より一層の珍奇あり
壹冊正價二十錢　郵税四錢

漢馬跡撰　日本佐藤槐先生旁釋
○忠經旁釋
木板手刷
正價拾錢　郵税四錢

○明治英名傳
正價金三十錢　郵税共

人命保險 人間長壽法
右ハ表題の如く人間の長壽する法なり藥を呑んで寢てゐる事と早や死にする事の御嫌ひの方ハ求め賜へ
正價郵税共三拾錢

○東京高名鑑
此書ハ府會議員、區會議員、新聞記者、演説者、詩文書畫の先生、代言人、等を掲載したる重寶の本なり
正價二十五錢　郵税共

○古今百馬鹿
正價金二十錢　郵税金四錢

○滑稽水掛論
正價金拾八錢　郵税金四錢

此書ハ世に四國屋猿松、百內屋扳作、大破家三太郎、惣領の甚六なる四者あり互に議論百出其一議一論實に笑を止むる事を知らざる滑稽本なり

一右書籍の外逐次出板書籍廣告仕候間續々御注文を乞ふ

千葉師範學校體操敎師馬場壽先生著
訂正增補 小學徒手體操新書 第二版
美本全一冊　定價八錢　郵税二錢

馬場壽先生著
○啞鈴體操新法
美本全一冊　定價金十錢　郵税金二錢

馬場壽先生著
小學生徒 美容術
全一冊定價金六錢郵税二錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

驛遞局認可

馬場壽先生著
訂正増補小學徒手体操新書圖解
定價金六錢 郵便税二錢

農學士菊地熊太郎編述
○化學理論一班 全一冊
定價金二十錢 郵便税金六錢

幌津倉治編輯
明治新刻○日本温古類聚 全壹冊
定價金三十錢 郵便税金六錢

小池民次序
新撰小學遊戲書 全一冊 馬場壽著
洋本仕立小本 挿密圖
定價金拾五錢郵税金四錢

千葉本町壹丁目 立眞本舍
東京大賣捌所 績文舍

新書發賣廣告

○茶の湯客の心得 全一冊廿三錢 郵税八錢
○英文單語獨案内 全一冊四十錢 郵税十錢
○音曲獨稽古 全一冊四十錢 郵税八錢
○大婦衛生論 全一冊四十七錢 郵税十錢
○遊藝獨稽古 全一冊三十錢 郵税八錢
○裁縫獨稽古 一名女子の資 全一冊五十錢 郵税十錢
女子作文記事論説文範 全一冊四十錢 郵税八錢
○西洋夫婦事情 全一冊十五錢 郵税四錢
○明治烈女傳 全一冊廿六錢 郵税六錢
○袖珍英和繪引 全一冊十六錢 郵税四錢

○英語獨案内 全一冊二十錢 郵税六錢
右何れも郵便切手代用を諾す御注文書着の即日送本可申上候
大坂 江戸堀大齊橋南詰東入 書肆 旭香舍

弊舎ハ數十年來活版印刷と書籍出板とを兼業罷在り因て他店の書籍と雖とも御注文有之ときハ其店にて賣る價を〔一割引なるの品ハ其店の割引の通り〕以て御取次仕候尤無手數料なり又女學叢誌御愛看諸君に限り東京府下千葉縣下出板書籍御購求上にて御尋有之節ハ郵券二錢御遣わらば諸店問合の上懇切に御回答申上候也

東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地
績文舍書籍掛敬白

發行所 東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地 績文舍
持主兼印刷人 松本義弘
編輯人 山田常治

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地 大賣捌所 修正堂
同 神田區淡路町 巖々堂
同 神田區雉子町 圖々社
同 日本橋區新葭町 艮明堂
同 牛込肴町十七番地 活神堂
同 芝區愛宕下町二丁目 高槻堂
同 本郷區本郷三丁目九番地 盛春堂倉田
大坂 府備後町四丁目 岡嶋文店
同 西區江戸堀南通一丁目 旭香舍
千葉 縣千葉本町一丁目 立眞舍
上總 國武射郡松尾 高林銀澁
江州 彦根西内大工町 新々堂
勢州 津京口町 郁文堂
陸前 國仙台大町四丁目 木村文助

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY